



2023年7月28日

発行 白百合女子大学児童文化研究センター
〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25 TEL 03-3326-7994 FAX 03-3326-1319
http://www.shirayuri.ac.jp/childctr/ e-mail : jido-bun@shirayuri.ac.jp
編集 白百合女子大学児童文化研究センター 印刷 (株) 南光堂印刷

富田文庫新資料のお知らせ

富田文庫新資料について — 富田博之先生の軌跡 —

浅岡靖史

る。アジア太平洋戦争敗戦後における、日本の演劇教育運動を牽引したお一人である富田博之先生の行動記録と所感には、すでに歴史的資料としての意義が認められると言つてよいだろう。

なお、今回寄贈された資料として、以上の他にも、貴重かつ興味深いものが多数存在している。

その一つは、学生時代の富田先生が書かれた四冊のノートである。福島県立保原中学校卒業直前の一九四〇(昭和十五)年一月から始まる『読書録(一)』、同年四月に入学した東京府立青山師範学校在学中の『読書雑録(2)』、『児童文学研究(第一篇)』、『寒久我起乃書(らくがきのしよ)』である。教育から児童文化へと視野を広げていく若き学徒の軌跡がうかがえる。

もう一つ、同じく富田先生が師範学校在学中に発行された手書きの同人回覧雑誌、『春の神様』と『廻覧雑誌 童話山河』第一輯から第三輯までの計四冊がある。これらには、富田先生が創作された童話・童話劇・童謡が多数掲載されている。富田先生には、運動家・評論家・研究者の他に、創作者という側面もあるが、その端緒を知る手がかりと言えよう。

また、戦後初期における学校劇研究会の記録ノートや、同じ時期の児童演劇に関するノートも含まれており、先に紹介した日記と照合することによって、戦後児童文化運動の動向に新たな光が与えられる可能性もあるかと考えられる。

その他、児童演劇脚本、雑誌編集ノート、研究会記録など、資料として今後生かされるべきものも少な含まれている。今後の研究に資するために、以上のすべてを含む目録の作成を急ぎたい。

(本学教授・所長)

センター主催講演会報告

二〇二二年度は第六十六回研究会を開催いたしました。

ご参加・ご協力いただきました皆様、誠にありがとうございました。

第六十六回研究会 小澤俊夫先生講演会

講演者	小澤俊夫氏 (本学元教授、元児童文化研究センター所長)
題目	昔話の扉をひらく
日時	二〇二二年七月三十日(土) 十三時〜十五時三十分
会場	Zoomによる遠隔開催
挨拶	浅岡靖史氏 (本学教授)
司会	酒井志麻氏 (本学助教)

小澤俊夫先生の講演会に参加して

伊藤かの子

二〇二二年七月三十日、小澤俊夫先生の講演会「昔話の扉をひらく」がオンラインで開催されました。

二〇二二年、富田博之先生御生誕百周年の年に、御子息の富田真紀氏より、新たな資料を寄贈してくださるといふ申し出があった。資料の中心は、富田先生ご自身がまとめておられたその著作物と、一九四六年に始まり、亡くなられた一九九四年まで、ほぼ途切れることなく書き続けられていた日記である。三月の事前調査、五月の分量確認ならびに輸送方法の検討を経て、六月の梱包作業の後、七月二日に段ボール箱九箱分の新資料が、児童文化研究センターに搬入された。

著作物の内訳は次の通りである。単著が十九冊。編者が十四冊。論考を収録した単行本が四十五冊。昔話の再話を取載した教科書・副読本が二十冊。論考・時評・再話等を掲載した雑誌が九十七誌。さらにスクラップブック二冊と紙袋に収められていた、主に新聞掲載の署名記事が計二〇五点。これらの内容は、ご専門の演劇教育ならびに児童演劇を中心としながら、広く児童文化や教育にまで及んでいる。一方で日記は、日々の行動記録を基本にしなから、その時々々の所感なども含まれているものであ

今回、先生は語られる文芸としての昔話についてお話していただきました。昔話は本来語り手が聞き手である子どものために、耳で聞いて分かりやすい言葉や構成で語るものであり、読むための本として文字で編まれた児童文学とはその点が大きく異なります。そして語り手によって声・喋り方の抑揚・語尾などはそれぞれであり、聞き手は昔話のストーリーだけでなく語り手が語る姿そのものを記憶し、だからこそ強く心に残るといふことをおっしゃっていました。

また、小澤先生は「うまかたやまんば」のお話の実演もしていただきました。私はこのお話は絵本やアニメーションとして見たことがあり少し怖い話だと思っていましたが、先生の穏やかな語り口で聞くと以前より素朴なおもしろみを感じ、昔話は語り手によって変化するのだということを実感しました。

さらに昔話は何を語り、何を目的としているのかという問いも提示されていました。先生が行ったフィールドワークでも初めから教訓を目的としている語り手は多くなく、本来彼らはお話の楽しさを子どもに伝えるために語っているとのことでした。また昔話の主人公として「ダメな子ども」がよく登場し、その「ダメな子ども」が昔話においては大きく成長したり幸せを得たりすることが多いと指摘されていました。なぜなら人は誰でも子どもの頃は年長者より劣っており、そうした人間の成長を語るのが昔話だからなのだと示されていました。

先生が講演会の中で繰り返しおっしゃっていたのは、身近な大人の「声」で昔話を語ることが重要なのだという点でした。声で語られたお話は子どもの記憶に強く残り、人生を支えるものとなる。私自身は声よりも文字や映像で昔話に触れることが圧倒的に多かった世代ですが、だからこそ今回は昔話の実演も含めて非常に興味深

い経験をさせていただきました。このような貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

〔博士課程（後期）在学中〕



センター客員研究員紹介

児童文化研究センターでは、現在、西村醇子先生と、生駒幸子先生に客員研究員としてご登録いただいております。今号では、客員研究員の先生方に最近のご著書や現在のご研究について、ご寄稿いただきました。

専門は何ですか？

西村 醇子

わたしは学生時代に児童文学を学びたいと思ったが、当時の英文科には児童文学系のゼミナールはなかった。自分でも児童文学の「研究者」や「翻訳者」になるつもりはなく、趣味として勉強会や読書会で子どもの本と関わっていかうと思っていた。でも人との出会いに恵まれ、さまざまな機会をへて、気づくと児童文学を紹介したり、授業で教えたりの立場になっていた。ただし、専門を述べるのは苦手だった。ダイアナ・ウィン・ジョーンズに関しては間違ひなく「翻訳者」（のひとり）である。でも物語の点数より、『新版オックスフォード世界児童文学百科』（原書房、二〇二三年）を含めて研究書や事典を共訳したほうが多く、「翻訳家」とは名乗りにくい。書評やブックガイド、評論、ときどき論文も書

いているが、「研究者」というのは、おこがましいから「児童文学者」とでも言えばよいのだろうか……。二〇〇五年、スタジオ・ジブリがアニメ映画「ハウルの動く城」を公開した。当時はファンタジー作品がブームになっていて、原作者ジョーンズや拙訳の『魔法使いハウルと火の悪魔』が注目された。わたしにも、書いた話したりしてほしいという依頼がきた。その後一過性のブームは収まったが、その頃になると、「ハウル」とは十分つき合ったのでしばらく封印したい気持ちになっていた。

それもあって、共著の『子どもの世紀』（ミネルヴァ書房、二〇一三年）のときも、日本人間関係学会の『人間関係から読み解く文学——危難の時の人間関係』（開文社出版、二〇一四年）のときも、わたしが選んだのはリアリズム系のイギリス作家ヒラリー・マツカイとルー・ス・エルウィン・ハリスだった。その後、後者の勉強会で再び本を出す話がでたときも、ある男性ファンタジー作家で書こうとした。けれども、どうしてもテーマがまとまっていけない。見かねたメンバーが助言してくれたが、結局この作家で書くことを断念し、久しぶりにダイアナ・ウィン・ジョーンズに取り組んでみようかと考えた。

改めて見直すと、一九九〇年代の学会発表以来、海外での口頭発表や各種の原稿でジョーンズの作品はたびたび取りあげていたものの、まだ語る余地はあった。それに久しぶりに書きたい気持ちにもなっていた。『越境のパラダイム、パラダイムの越境——フュスリ絵画から魔法使いハウルまで』（春風社、二〇二三年三月）で、ダイアナ・ウィン・ジョーンズ論をまとめたのは、こんな経緯があったからだ。そのおかげで、ジョーンズを含めたイギリス児童文学が自分の専門なのだ改めて悟った。

ジョーンズについては、まだ取りあげたいことがある。ジョン・エイキンも追いかけていたのだが、十年ぐらい前で中断したままになっている。この三月で教職を退いたから、時間はできた。残る問題は、彼女たちの作品と新たに取り組むだけのエネルギーをわたしがもてるかどうかかもしれない。

〔客員研究員〕

学生に教えられて

生駒 幸子

私が光吉文庫に行かせていただくようになったのは、光吉夏弥氏の業績研究に取り組み始めたことがきっかけでした。もう二十数年も前のことになってしまいました。が修士論文研究で、戦争まもなく出版された『ひとまねこざる』（岩波書店、一九五四年）シリーズの調査をしたことから、光吉氏の業績研究に導かれ、貴研究センターとのご縁を与えられました。関西からひよっこり来訪した私をいつも笑顔で迎えてくださった先生方や助手のみなさんに、どれほど支えていただいたことでしょうか。研究が遅々として進まない時、挫けてしまい研究に向かえない時、白百合のみなさんの励ましに心をあたためていただきました。そのようなご縁のもとに、研究員としての今の私があります。

今回のこの原稿依頼から、自らのこれまでの研究、また教員としての道のりを振り返ってみました。大学で日本近現代文芸を学び、大学院で児童文学、特に絵本の研究を始めました。博士論文研究の道半ばで保育者養成校に奉職することとなりましたが、教員としての道のりは試行錯誤の連続でした。私が勤める短期大学では保育士

資格、幼稚園教諭免許状を取得するカリキュラムが編成されており、そこに組み込まれた科目として児童文化、保育内容「言葉」、実習指導などを担当してきました。しかし子育ての経験はあっても保育者としての実務経験を持たない私が、保育者を目指す学生にいつたい何を教えられるのだろうかかと心底、苦悩しました。私の専門研究は戦中・戦後の翻訳絵本史であり、保育で取り扱われる児童文化財としての絵本だけでは詳しいことになりませんが、児童文化財の学習だけでは、学生は保育者の資質として求められる保育実践力の獲得には至りません。私のなかで研究対象としての絵本から、教授内容としての絵本へと、質を転換させる必要があります。保育者養成校で学ぶ学生たちはみな子どもの幸福を願い、過酷な時間割と厳しい実習において誠実に学んでいます。その真剣な姿勢に心を打たれ、一つでも学生の役に立てるような授業をしたいと思ふようになりました。その思いに賛同してくださった川勝泰介先生、浅岡靖央先生ほか多くの先輩方にご尽力いただき結実したのが、テキスト『ことばと表現力を育む児童文化』（明文書林、二〇一三年）です。

昨年度のセンター論文集で高原佳江先生が「子どもと絵本の世界を楽しもう」学修プロジェクト（アクティブラーニング・プログラム）を取り上げてくださいましたが、これには前身となる「りゅうたんよこどもシアター」という学修プロジェクトがあり、それを発想転換させたアイデアです。「絵本は読み聞かせるもの」という思い込みから少し離れて、絵本の魅力を最大限に遊びに取り入れて、子どもたちに絵本の世界に入り込むようにして楽しんでもらいたいという願いから生まれたものです。幸運なことに、私が勤めている大学では授業改善・教材開発のためのFD研究助成（自己応募研究プロ

ジェクト）があり、これに採択されることで着実に授業改善に取り組むことができています。学生の学びの姿や学修成果からは本当にたくさんのごことを気付かせてもらっています。毎年度、学修プロジェクトを少しずつブラッシュアップしながらよりよい学修支援を目指して授業改善に取り組んでいます。教員としての私は、まさしく学生に育てられていると実感しています。

〔客員研究員〕

構成員活動紹介

「怖い話」とルールの世界

山越 夢子

「怖い話」が好きな子ども、あるいは「怖い話」を必要としている子どもは、「怖い話」を読むときに何を感じているのでしょうか。

私は大学院で安房直子作品の研究をした後、小学校の図書館指導員として勤めていたのですが、その際多くの児童から毎回のよう「怖い本はありますか」と聞かれました。様々な図書の紹介や読み聞かせを行いましたが、最も反響が大きかったのは、「くいしんぼうのおむしくん」（槇ひろし作、前川欣三画、福音館書店、二〇〇〇年九月）という絵本でした。

この絵本では、無限にものを食べてしまう「おおむし」の飢餓感を、当人も周りもコントロールすることができず、「まさお」という子ども以外のすべてが「おお

むし」に食べられてしまいます。そして「おおむし」は、すべてを失い泣いてしまった「まさお」のことも食べてしまいます。そのときに「まさお」が見たものは、「おおむし」の体内に、かつて「おおむし」に飲まれたすべてのものが元通り存在している光景でした。

このように、嵐のような暴食で次々に「まさお」の周りにあるものが無くなっていった結果、体内と体外が反転した世界に辿り着くという展開に、子どもたちは衝撃を受けたようです。幽霊やおばけに関する怖さではありませんが、不穏さを増していく展開には、面白さと、ぞつとするような不安感があります。

「怖い話」といえば、私が研究していた安房直子作品もよく「怖い」と言われます。今私は小学校の教員として勤めているのですが、安房直子作品の研究をしていたことを話すとき必ず言われるのが、四年生の国語教科書（光村図書）に掲載されている安房直子の「初雪のふる日」が「怖い」という感想です。この作品では、女の子が、どこまでも続く白ウサギの石けりの行列から出られなくなってしまう。このまま行列から出られずにいると、世界の果てまで連れられて小さい雪のかたまりになってしまうというのです。

近頃私は、「くいしんぼうのおおむしくん」や「初雪のふる日」のような「怖い話」が、子どもの生活の中でどのような意味を持つのかを考えています。小学校では、児童に徹底的にルールを守らせますが、それは児童が学校生活を通して、秩序を守って生きていく練習をしているからです。学習も、世界に存在するものを秩序立てて理解・記憶・出力していく過程なので、児童は学校にいる間、強固なルールの世界に参加することになります。しかし上記のような作品では、子どもたちが今一生懸命学んでいる強固なルールの世界に、突如何か別の世

界のルールが現れ、そのルールが自分たちの秩序ある生活を脅かしてきます。それは、恐ろしさや不安をもたらすものであると同時に、窮屈なルールの世界を破壊する可能性をもつものでもあります。しかし、その別世界もまた、何らかのルールに支配されているのかもしれない。

秩序に守られたこの世の枠組みの外に何か別のものがあり、それが強固だったはずの枠を破ってこちらの世界のルールを揺るがしていると感じたとき、子どもたちの心に恐怖と表裏一体の何かが閃いているのではないかと、そのようなことを今は考えています。

〔研究員〕

大学院生活動紹介（インタビュー）

博士課程（後期） 在学中の孔阳新照さんコウヤウシンシャウは二〇二二年

一月、「中国での日本児童文学作品の翻訳出版と自作絵本の出版」と「日本の児童文学作家作品の翻訳と中国の子どもたちに挿絵をつけてもらう取り組み」が評価され、二〇二一年度「学生活動に関する顕彰制度」の学生活動奨励賞を授与されました。表彰の理由となった二〇二一年出版の絵本『不要和糯米团捉迷藏（もちだんごのかくれんぼ）』（絵・谷米）を皮切りに、翌年には絵本『99顆红豆去旅行（99粒のあずきちゃんのだび）』（絵・谷米）と長編ファンタジー作品『白露庄园之夏（白露庄园の夏）』（絵・董桐）を出版するなど、意欲的に創作活動に取り組みられています。

そんな孔さんに、創作にまつわる質問にお答えいただき

きました。

一、創作をしようと思ったきっかけはどんなことですか？

私は、子どもの時から創造や絵画が好きです。その時たくさん児童文学作品を読んで、感銘を受け、自分もこの様な優れた作品を創作したいと思いました。私は大で広告クリエイティブを学びましたが、卒業後に自分が好きな児童文学の専攻に進むことを決めたため、白百合女子大学で修士課程に在学しながら、学部のいとうひろし先生や石津ちひろ先生の創作授業を聴講していました。中国で本の出版ができて、非常に嬉しく思います。今後も創作の道が続けたいと思います。

二、出版された絵本は、どちらも食べ物のキャラクターが活躍しています。食べ物の擬人化という表現方法を用いた理由を教えてください。

私は長く留学しているため、中国の美食を非常に懐かしく思っています。しかし、中国国内の食べ物の絵本は、多くが海外の絵本で、パスタ、カレーライス、寿司など、中国の子供たちには馴染みがありません。そこで、中国の伝統的な食べ物を擬人化して、食べ物を「変身」させることによって食べ物の面白さを子どもの読者に感じさせたいと思いました。このシリーズは、年に一冊のペースで出版する予定です。

三、絵本に登場していた食べ物のなかで、孔さんのお気に入りのものがあつたら教えてください（できれば、その食べ物に合うお茶も教えてください）。

私はもちもちとした糯米団が好きです。『もちだんごのかくれんぼ』の最後のシーンに登場する「竹筒ごはん」は、竹筒に糯米を入れて蒸して作られるもので、竹の清涼な味わいがあります。私は中国の紅茶と白茶が好きで、桃花酥や緑豆餅などと一緒に飲むと、香り高く爽やかでとても美味しいです。

四、中編童話はセンタープロジェクト「SF・ファンタジー小説の研究と創作」（二〇一九年度）の成果物でもありますね。プロジェクトでは、この作品を書くためにどのようなことをしたのでしょうか？

『白露庄园之夏』は私の最初の長編作品です。「SF・ファンタジー小説の研究と創作」のメンバーとファンタジー世界の作り方や創作手法などをよく議論しました。この作品は、安房直子童話や『メアリ・ポピンズ』をオマージュした、everyday magicのファンタジー童話です。現実の日常世界に少し不思議な出来事が起り、それに、安房直子のファンタジー世界のように、現実と幻想の境界を曖昧にしたいと思いました。読み返すと、自分で新鮮だと感じます。

五、研究と創作を両立することについて、良かったなと思うこと、大変だなと思うことを教えてください。

研究と創作は異なる立場であり、作家は直感や感覚、潜在意識を働かせてお話を作りますが、研究者は文学理論や心理学など様々な解釈を見つけることができます。研究するうちに、「面白い理論や解釈方法を見つけたら、『自分の作品にも使おう!』と思う時もよくあります。

研究と創作を共にやるには冒険の旅に出る感覚が常にあります。わくわくしますね。

（博士課程（後期）在学中）



プロジェクト活動報告

児童文化研究センターでは、センター構成員による研究の促進を目指しプロジェクト制度を設けています。二〇二三年度は、次の六つのプロジェクトが活動しています。プロジェクトへの参加を希望される方は、センターまでお問い合わせください。

小波日記研究会（小波日記を読む）

（研究代表 猪狩友一）

巖谷小波日記（センター所蔵の複写資料）の翻刻・研究を継続しています。およそ月一回のペースで研究会を開き、主に日記本文（くずし字）の解説と翻刻案の確認・修正を行っています。対面とオンライン（Zoom）を併用しており、どちらでも参加できます。現在明治四十年あたりを読んでいます。この頃の文学・文化に興味がある方なら、どなたでも歓迎します（くずし字が読めなくてもOK）。国語国文学専攻の院生も出席する場合があります。新規で参加する場合は、猪狩までメールで申し込んでください（メールアドレスは児童文化研究センターにお尋ねください）。研究会の開催情報や参加方法をお知らせします。

近現代児童詩歌研究

（研究代表 宮澤賢治）

本プロジェクトの活動成果をまとめた『児童詩歌』は、十八号となりました。第一号から続く「賢治と童謡」（十八）は、賢治の仏教的な歌も童謡の範疇に入るのではという所見から、「ご詠歌」と作品との関連性を考察しています。「竹久夢二『歌時計』に関するノート」は、本童謡集の序文に示される夢二の子ども観・童謡観を明らかにした上で、作品の特徴や意図を検討しています。「中川ひろたかの『あそびうた』研究」（七）は、中川のおそびうた集大成といえる『あそびソングブック』を考察し、中川の功績についても論じています。そして、今回初投稿となる志村裕子の「どんぐり話」と「どんぐりイメージ」については、唱歌「どんぐりころころ」を端緒に、どんぐりのイメージと時代の様相について探究しています。

昨年度よりメンバーの加入がありましたので、今年度は近現代の児童詩歌へのアプローチがより多彩になるのではないかと期待しています。研究会開催の時期や手段は、適宜検討して進めて参ります。

紙芝居研究

（研究代表 浅岡靖史）

二〇二二年度は、新メンバーも加わり、五月・六月・七月・九月・十一月と、研究会を計五回開催することができました。各回の内容はさまざまですが、基本的には

メンバー各自が、興味深い紙芝居作品を実演披露したり、紙芝居に関する研究を発表したり、紙芝居に関して得た情報を持ち寄りしてあります。『紙芝居研究』第六号も、二〇二三年三月に無事に刊行できました。研究会は、紙芝居に関心のある方や、紙芝居を楽しんでみたい方であれば、どなたでも、見学・見物だけでも、いつでも、一回だけでも、大歓迎します。

ちりめん本研究

(研究代表 間宮史子)

本プロジェクトは大学図書館所蔵のちりめん本について研究することを目的としています。各自がテーマを設定して研究を進める他、メール等で情報交換をしています。

昨年度は、尾崎るみさんが『児童文化研究センター研究論文集26』に「カール・フローレンツと長谷川武次郎―ちりめん本による日本詩歌の海外発信」を発表しました。また、杉村裕子さんが、聖徳大学特別展覧会「ちりめん本」展で解説の一部を執筆しました。本年度は各国語版の邦訳も行う予定です。参加条件はありませんが、英仏独以外のスペイン語やポルトガル語等が得意な方を歓迎します。

「神宮先生のお仕事を振り返る」研究会

(研究代表 白井澄子)

一九九五年から二〇二二年まで本学教授を務められた神宮輝夫先生の業績を振り返ることを通して、日本にお

ける児童文学史および研究史の一面を検証し、我々が「引き継いでいくべきこと」と「乗り越えていくべきこと」を明らかにするためのプロジェクトです。「評論」「翻訳」「研究」の三グループに分かれて、各領域での先生のお仕事の全体像を把握したのちに、テーマを絞って精査し、児童文学史・研究史における位置づけや児童文学界に与えた影響を解明しようとしています。八月、十月に合同研究会を、十一月に学会発表を予定しています。



研究会のタイプ 資料蒐集／資料解説
必要なスキル なし
新規で参加できるタイミン グ 随時

児童文学とアダプテーション研究

(研究代表 酒井志麻)

二〇二三年度に新しく発足したプロジェクトです。近年、児童文学の世界でもアダプテーションが注目されていますが、本プロジェクトは、現時点でのアダプテーション研究の手法を知り、可能性を探求することを目的としています。研究書などを参加者全員で輪読して、意見交換を行う、読書会方式の勉強会です。映画だけでなくアダプテーション全般に興味のある方や、読書会的にみんなで研究書を読んでみたいという方も大歓迎です。研究会は、長期休暇を中心に、年に複数回開催する予定です。年度の途中でも大歓迎ですので、お気軽にご参加ください。



センターからのお知らせ

センター研究会

これまでの「構成員研究発表会」が、「児童文化研究センター研究会 前期／後期 発表会」に生まれ変わります。「大学院生研究発表会(博士論文構想発表会・修士論文中間発表会／修士論文発表会)」と「構成員研究発表会」を前期・後期に分けて行います。詳細は児童文化研究センターホームページやメールリングリストなどお知らせいたします。

先生方のご著書

- 二〇二二年六月から二〇二三年五月までに刊行された、センター所員の先生方のご著書(訳書・編纂などを含む)を刊行順にご紹介いたします。
- 菊地浩平『人形と人間のあいだのころをよむ』エッセイ出版、二〇二二年十月
- 小松和彦責任編集『怪異の民俗学 8 境界』河出書房新社、二〇二二年十一月
- ※森下みさ子先生「境界にたたくむ子ども・老人―泣き声に聴く―」を収録。二〇二〇一年河出書房新社刊の新装復刻版です。
- 佐藤宗子・久米依子編『現代日本子ども読書史図鑑』柘風舎、二〇二三年一月
- ※水間千恵先生が執筆に参加。本学にご縁のある先生方やOGの方々も参加されています。
- ハーン、ダニエル編著『オックスフォード世界児童文

学百科』白井澄子・西村醇子・水間千恵監訳、原書房、二〇二三年五月

○汐崎順子編『子どもの読書を考える事典』朝倉書店、二〇二三年五月

※水間千恵先生、森下みさ子先生が執筆に参加。本学にご縁のある先生方も参加されています。

○浅岡靖央編・解題『日本少国民文化協会』資料集大成』全八巻、金沢文圃閣(続刊)



センター構成員一覧

(二〇二三年七月現在・敬称略)

所長

浅岡靖央

運営委員

浅岡靖央 井辻朱美 菊地浩平

間宮史子 水間千恵 森下みさ子

やたみほ

所員

浅岡靖央 猪狩友一 井辻朱美

菊地浩平 間宮史子 水間千恵

森下みさ子 やたみほ

客員所員

小澤俊夫 白井澄子

松井千恵 宮澤賢治

助手

酒井志麻 宇佐美奈麻子

遠藤知恵子 若谷苑子

客員研究員

生駒幸子 西村醇子

委嘱研究員

木村八重子 竹田修

増田珠子 横田順子

研究員

安達愛 石元みさと 伊藤かおり

尾崎るみ 金子真奈美

岸野あき恵 小林夏美 佐々木江利子

佐々木裕里子 沢崎友美 志村裕子

鈴木あゆみ 鈴木宏枝 鈴木律子

中川理恵子 浜名那奈 半田涼太

杉村裕子

宮崎麻子 八代華子 山越夢子

山本麻里耶 劉冠玫 和田啓子

準研究員

黒川夏帆

院生(博士課程(後期))

阿部泉 伊藤かの子

孔阳新照 西村明恵 沼本知自

原田優香 日暮英里佳 三井彩愛

院生(博士課程(前期))

西大條優香

二宮加奈子

深見けいと 松本唯 雷瑠玉

編集後記

今号は、客員研究員の西村醇子先生と生駒幸子先生、研究員の山越夢子さんと博士課程(後期)在学中の伊藤かの子さんにご寄稿いただき、博士課程(後期)在学中の孔阳新照さんにメールでインタビューにお答えいただきました。皆様、ありがとうございました。

児童文化研究センターは、児童文学・児童文化研究者の皆様の研究・発表・交流の場として、事業の維持と益々の充実を図ってまいります。今後とも、変わらぬご指導とご厚誼を賜りますよう、お願い申し上げます。(酒井・宇佐美・遠藤・若谷)

児童文化研究センター夏期閉室期間

七月二八日(金)～九月二日(木)

※右記の日程は変更することがございます。ご了承くださいませ。

※後期は、九月二日(金)より通常開室いたします(午前九時～午後五時)。





『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集27』原稿募集

児童文化研究センターでは、児童文学・文化研究の活性化を目的として、年に一度、研究論文集（査読制）を発行しています。今年度も、以下の要領で『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集27』（二〇二四年三月発行予定）の原稿を募集いたします。

締切

二〇二三年九月二七日（水）正午必着

提出物

- ① 表紙（論文題目、氏名、構成員の身分、郵便番号、住所、メールアドレス、文字数、投稿区分（研究論文／研究ノート）、申告事項（あれば）を記載）
- ② 本文（参考文献、注、図、表等を含む）
- ③ 論文要旨（300字以内、論文題目を併記）
- ④ 欧文要旨（採用決定後、100 words以内で提出。欧文題目を併記）

以上、①〜③について、プリントアウト各一部及びデータを提出すること。

提出先

〒一八二一八五二五
東京都調布市緑ヶ丘一―二五
白百合女子大学 児童文化研究センター 宛

データの送付先

<endo@shirayuri.ac.jp>

研究論文集担当 遠藤知恵子

審査規定

（センター規定より抜粋）

* 研究論文集審査のための編集委員会を設置する。

- * 編集委員は所長が依頼した、本学専任教員またはそれに相当する者から構成される。
- * 投稿原稿は編集委員会の審査を経て、許可されたものが掲載される。

投稿規定

- 一、執筆者は原則として児童文化研究センター構成員とする。
- 二、児童文学・文化に関する研究論文、研究ノートを対象とする。
- 【研究論文】 先行研究に加えるべきオリジナリティーのある研究成果が明確に述べられているもの。
- 【研究ノート】 資料の紹介・精査、論点・仮説の予示、既存の仮説の検証作業、研究の中間報告等、優れた研究につながる可能性のある内容が明確に記述されているもの。

- 三、投稿に際して、審査を希望する投稿区分を明記する。ただし、審査結果によって、区分は変更されることがある。
- 四、表紙、本文、論文要旨、欧文要旨はマイクロソフト社のワードで提出する。

※ 欧文要旨は、提出前に予めネイティブチェックを済ませておくこと。

- 五、本文のフォントサイズは10・5ポイント、用紙サイズはA4判、文字数と行数は40字×30行となるように設定する。縦書きの場合、用紙の向きは横とする。本文の枚数は20枚以内とする。
- 六、参考文献及び注は本文末に一括する。
- 七、ページ番号を本文の中央下に付す。

※ 書式の細部についてはMLA Handbook最新版及び過去の研究論文集を参照し、特に欧文文献を引用する際はMLA Handbook最新版に準拠すること。

- 八、本誌に掲載された著作物の著作権は著者に帰属する。当該著作物は、「クリエイティブ・コモンズ表示 非営利 改変禁止 4.0 国際 (CC BY-NC-ND 4.0) ライセンス」及びその後継版のもと、白百合女子大学学術機関リポジトリで公開する。なお、執筆者がその他のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの選択を希望する場合は、原稿採用後に、その旨を「学術機関リポジトリ「内容記述」記載データシート」に記載すること。執筆者が当該許諾に同意しない場合は、その旨を「学術機関リポジトリ「内容記述」記載データシート」に記載すること。その意思表示のない場合は、同意したものと見なす。

審査結果発表

二〇二三年十月中旬

注意事項

- a. 完成原稿を投稿する。
- b. 原則として、数字は、横書きの場合は半角英数字、縦書きの場合は漢数字を用いる。いずれの場合も半角カタカナを使用しない。
- c. 特殊記号、飾り文字、不必要なスペース等をなるべく使用しない。
- d. 図版を掲載する場合、引用要件を満たし、出所を明示する。
- e. 画像は鮮明なものを使用する。高度な印刷技術が必要とする場合は、実費自己負担となることもある。
- f. 学会等で口頭発表したものを投稿する場合は、その旨を本文末に記載する。
- g. やむなく投稿規定を逸脱する場合は、その旨を表紙に記載して申告する。その内容は編集委員会で審議される。
- h. 採用した原稿についての著者校正は初校、再校のみとする。著者校正での誤字脱字以外の加筆修正は原則として認めない。
- i. 不明な点については、研究論文集担当者に問い合わせの上確認する。